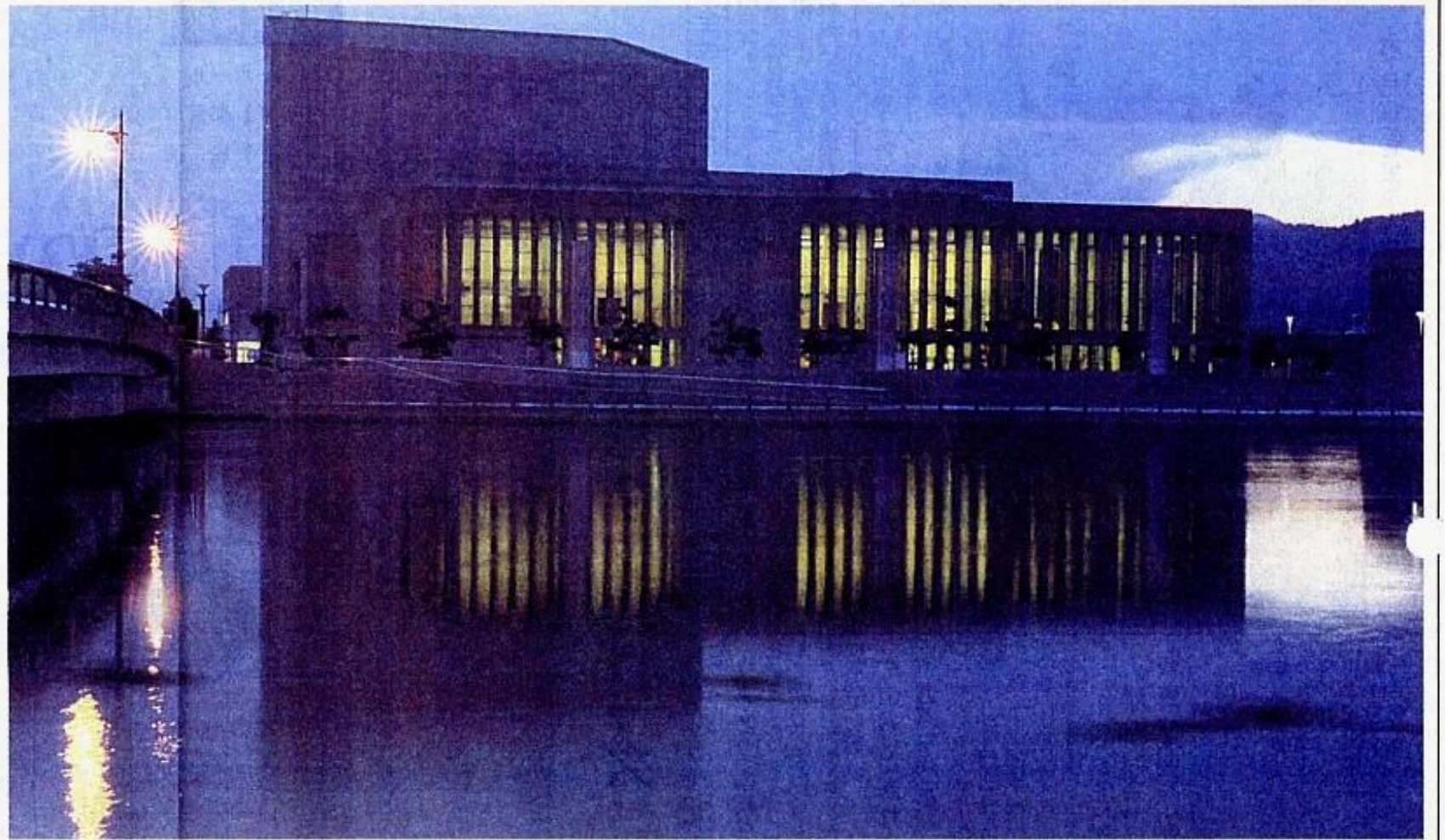


# とくしま 見 再 発 見

鳴門市は、板東惺(ふ)廣  
収容所でのペーター・ベンの交  
響曲第九番の日本における初  
演地として毎年演奏会を開催  
している。その演奏会場とし  
て使用されているのが、鳴門  
市民の文化活動の拠点となっ  
ている鳴門市文化会館であ  
る。撫養川の川面にコンクリ  
ート打ちっ放しの硬質な姿を  
映し出して建つこの建物は、  
長らく京都大学教授を務めて  
いた増田友也の晩年の設計に  
よるものである。かつての鳴



夕暮れの撫養川に映える鳴門市文化会館。開口部のコンクリート縦型ルーバーの連続が端正な景観をつくり出している

## 鳴門市文化会館

門の基幹産業であった塩田跡を埋め立てた敷地内に、先に建つ同じ増田友也設計の老人福祉センター、勤労青年ホームと並び、同じデザインで統一した特徴ある開口部のコンクリート縦型ルーバーの連続が、端正な景観をつくり出している。

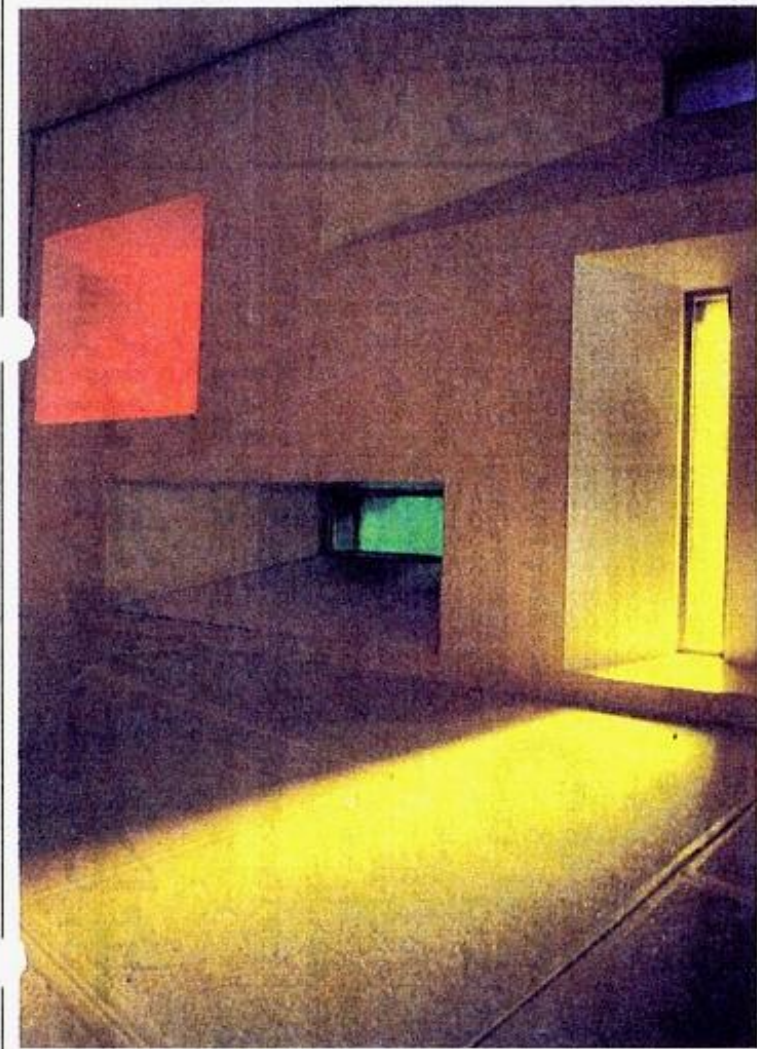
鳴門は、増田作品の宝庫といわれるほど彼の設計した公共建物が多く、幼稚園、小学校など数え切れない。それは、時の鳴門市長であった谷光次氏が京都大学の同門であ

## 端正、ダイナミックな景観

増田を信頼して依頼したものとされている。市内を通るのどかなく、のどかな鳴門の風景に緊張感を与えるスパイスのような存在であった。しかし、年月を重ねるうちに



《メモ》鳴門市文化会館 鳴門市撫養町南浜東浜24-1。1982(昭和57)年完成。設計・増田友也、施工・間組。SRC造り3階建て延べ7525平方メートル。  
増田友也 1914-1981年。兵庫県生まれ。39年京都大学工学部建築学科卒、50-78年京都大学講師、助教授、教授。75年シドニー大学客員教授、78年京都大学名誉教授、80-81年福山大学教授。著書に「建築的空間の原始的構造」「建築計画」「日本住宅の空間論的考察」家と庭と風景 など。  
ルーバー 天井または壁面に設けられる開口部の一つで、本来は水平の羽板を備えたもの。採光や排煙のため、または空気の流通を妨げないで、日よけ、雨よけになるもの。増田は、ここで建物の外側に縦にコンクリートの板(壁)を規則正しく並べて垂直性を強調したデザインをつくり出している。



コンクリート打ちっ放しの硬質なイメージの中、建物内部の開口部には色ガラスを使うなど工夫が凝らされている

に突き出し、一段と高くそびえるフロイドフト(舞台上部)が斜めに天に向かって飛び出してダイナミックな造形をつくっている。

また、使いやすそうな楽屋の配置などに使用者への配慮が行き届いていると思われるし、大道具の搬入も楽との評判も聞く。現在ではやさしいまじりくり条例もできてバリアフリー化が叫ばれているが、二十年近く前の完工でありながら客席への車いすでのアプローチも容易で、ソフト面では使い手の身になって細かい所まで十二分に考えられている。見た目と異なり、使い勝手は温かくて柔らかく、豊かさを感じさせる建物なのである。これが存在論的建築作品の本質なのかと上層だけを眺めて勝手に安易な解釈をしてしまいが、「本質はもっとも言われる増田流の縦ルーバーを持ち、内装もコンクリート打ちっ放し仕上げが多いので、堅いイメージがある。しかし、平面計画は大胆で、オーティリアムが建物壁面線と角度を持って配されて中庭



会館前のミニメントも同じ縦ルーバーのデザインで統一されている

土曜日に掲載します。

# とくしま 月 見 再 発 建 物

9

## 小松島航空隊庁舎

### 旧海軍の遺産受け継ぐ

終戦後五十五年を経過した現在、戦争の記憶をとどめる事物も少なくなってきた。が、今回はそんな一端にも触れる。普段目にかかれない「軍事施設」を紹介する。

(一)海上自衛隊小松島航空隊は、前身が旧日本帝国海軍航空隊で、一九三八(昭和十三年)に着工し、十二月の真珠湾攻撃での日米開戦を間近に控えた時局の緊張著しい四年十月一日に開隊している。当時は水上偵察機の教育隊基地で、単発プロット付き水上偵察機と四発哨戒偵察機が装備されており、滑走路は長く、格納庫から出すとスロ

ープで海に降ろすようになっていた。終戦から二カ月後の四五年十月には米軍砲兵連隊が進駐している庁舎だが、軍事施設としての任に着いているのは、この庁舎と、ゲ

物の写真を見ると、この建物は堅固目的に鉄筋コンクリート造りで、両翼には木造二階建ての建物がつながっている。この時代の官庁建築の決まり事のように、中央に車寄せを兼ねた玄関ポーチを配し、シンメトリーの外観

昔の写真をみると、この建物は堅固目的に鉄筋コンクリート造りで、両翼には木造二階建ての建物がつながっている。この時代の官庁建築の決まり事のように、中央に車寄せを兼ねた玄関ポーチを配し、シンメトリーの外観

艦を思い起こさせるが、やはりこの建物も両翼の木造部と一体化してデザインされたと考えるのが順当であろう。しかしなぜ、中央部だけ鉄筋コンクリート造りなのであるのか。戦時下で建築資材が貴重で、特に鉄は民間に供出

終戦直前には数回、米軍の爆撃を受け、この建物にも銃弾の跡が生々しく残っていた。そうだが、補修されたのかその痕跡は見当たらない。内部もいたって贅麗で、人造石研ぎ出し手すりの階段に敷かれた赤いじゅうたんが、モントーンの色調の中でひときわ際立って目につく。自衛隊のこの規律正しい階級社会では、赤いじゅうたんを踏んで階段を上ることが昇進を象徴しているように思えた。

して使用していたが、その後基地はこの庁舎のみ残して撤去され、放置されていた。十数年のプランクを経て、六五年三月二十五日に海上自衛隊の自衛艦隊航空隊第二航空群所属のヘリコプター基地として開設され、現在、対潜哨戒のヘリコプター基地と

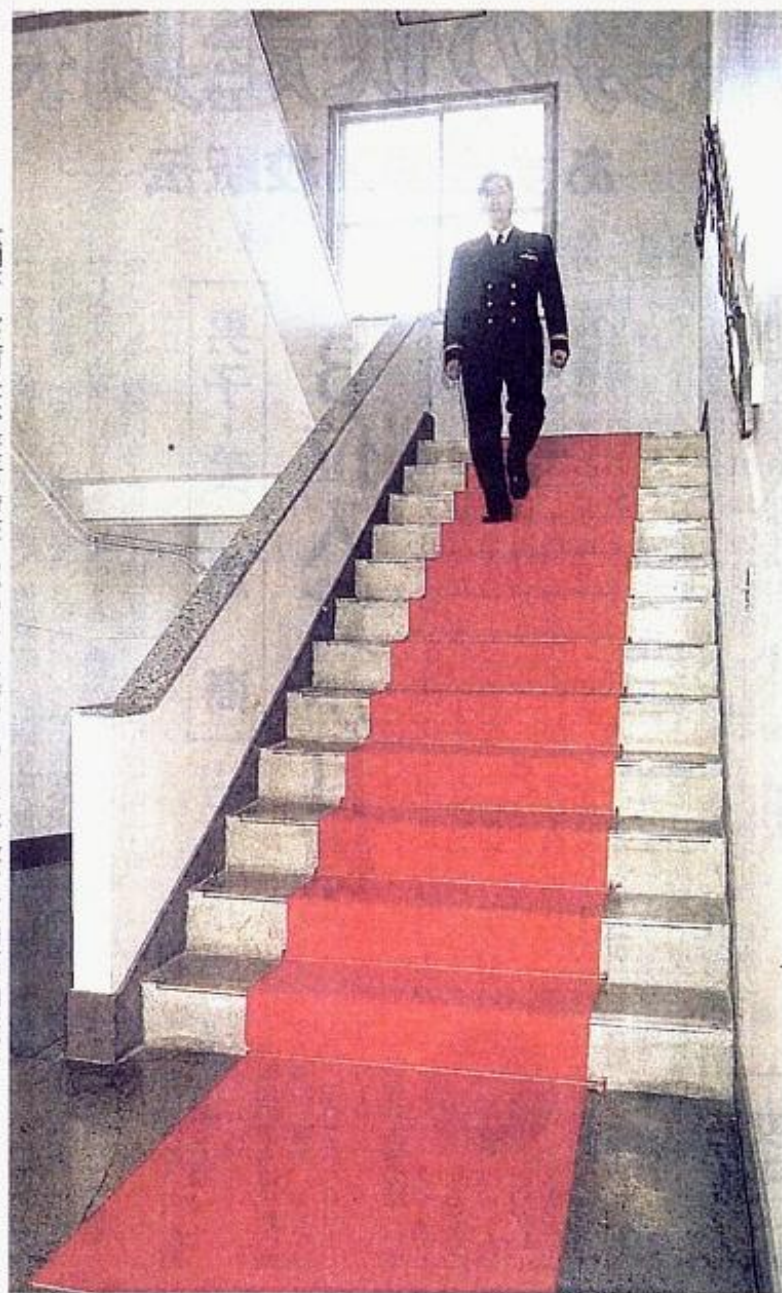
いうのは物々しく、なんら普通のビルと変わらない。外観は装飾もなく、いたってシンプルな外観で、物資の乏しくなった時局のせいなのか、それとも陸軍と海軍の気風の違いが建物にも表れているのか。気がなべて比べてみたいところではある。

で安定感を与える構成である。現在はその両翼を取り払われたような格好なので、少し縦横のバランスを崩し、やけにポーチが大きく見える。中央部だけ移築された文化の森の旧庁舎(県立文書

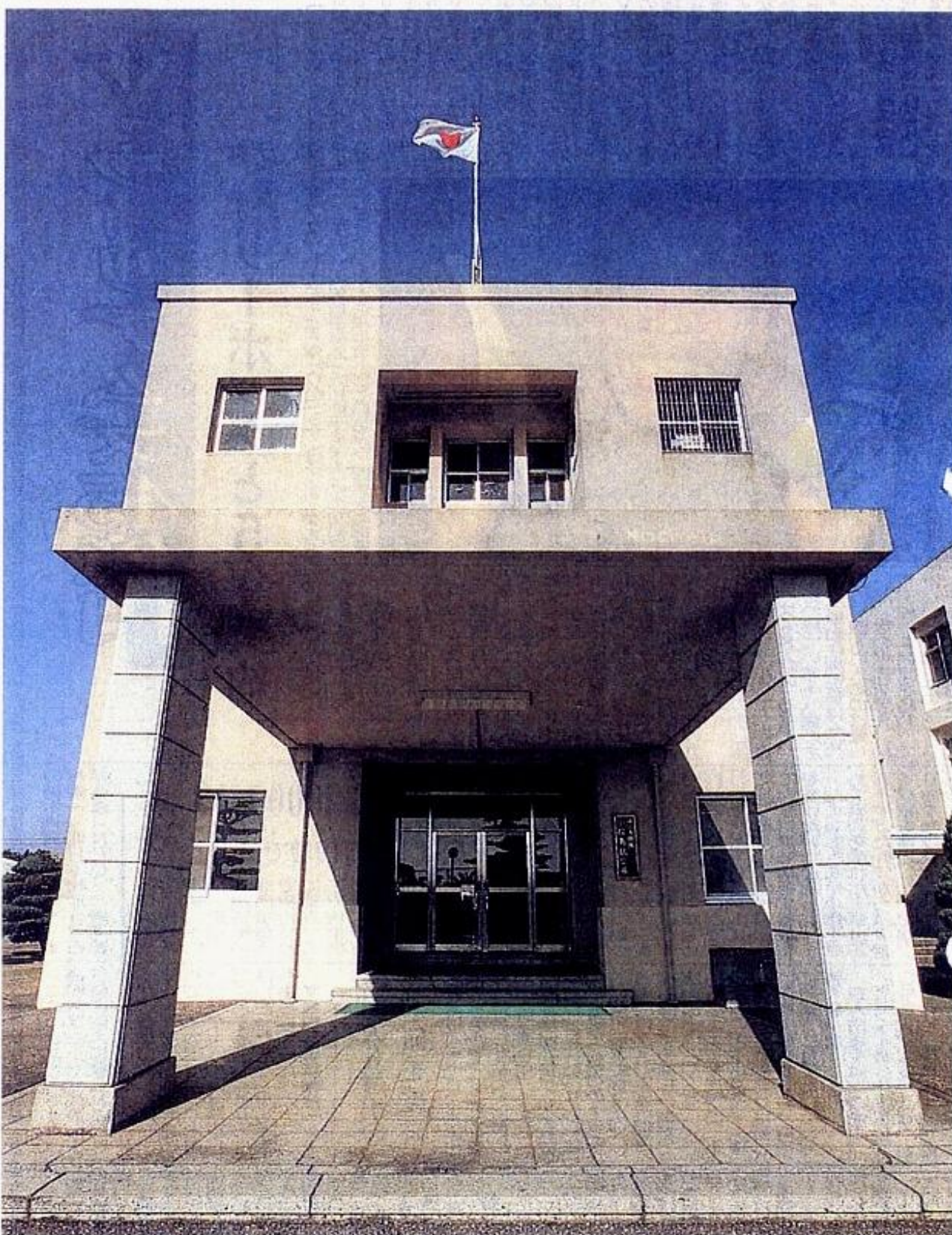
させていた時代。やむなくほとんどを木造で建てざるを得なかったであろう。それでも中央部は重要な隊の中枢部として耐火構造としたのと、玄

林 茂樹・日本建築学会会員 小松島市中田町興林、写真 末澤弘太

このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。



玄関ホール正面には、存在を誇示するような赤いじゅうたんが敷かれた階段。制服姿の幹部隊員が胸を張って下りてきた。



旧海軍時代にはあった木造2階建ての両翼がないため、建物の幅に比べて大きく感じる玄関ポーチ。隊の顔としてのシンボリックなデザインは健在



《メモ》海上自衛隊小松島航空隊小松島市和田町洲端。旧海軍鎮守府第12連合航空隊所属小松島海軍航空隊。本部、飛行隊、整備隊、基地隊から成り、対潜哨戒が主任務。災害救援や海難救助、救急患者・血液などの急送にも出動。隊内消防隊が近隣火災の消火にも当たる。隊員約400人。



旧海軍時代の面影を残す松並木とその奥にある庁舎

# とくしま 見 発 再 建 物 屋

14



景観を損なわないよう、山の斜面に合わせたV字の宿泊棟は自然にとけ込んでいる

黒川紀章氏 1934年名古屋生まれ。57年京大工学部建築学科卒、59年東大建築学科修士課程卒。62年黒川紀章建築・都市設計事務所設立、64年東大建築学科博士課程修了。著書に「都市デザイン」「行動建築論」「メタポリズムの思想」など。

ている黒川紀章。京大で西 作品を造り始め、すぐに頭山卯三(第一回で紹介した 角を現した稀有な存在である。黒川土文化会館の設計者)から「建築が社会的存在である」という建築理論を学び、東大大学

院に進んで現在日本建築界のトップに君臨する丹下健三から建築家としての作品創造技術を吸収してきた。1日1館など三施設を担当する大学院在学中に事務所を設立。一般的な建築家のたどりしる三十代まで設計事務所での修業してから独立するといふ道からは外れ、若くして

## 山川少年自然の家

一九七〇(昭和四十五)年に開かれた大阪万博で、三十六歳の若さで東芝創造技術を吸収してきた。1日1館など三施設を担当する大学院在学中に事務所を設立。一般的な建築家のたどりしる三十代まで設計事務所での修業してから独立するといふ道からは外れ、若くして

# 冒険心養う巨匠の造形

記憶もないし、県内でも話に上ることはない。彼の設計だと知る人は少ない。なぜだろうか? この時期は、福岡銀行本店(福岡市)やソニータワー(大阪市)、石川厚生年金会館(金沢市)、日本赤十字社本社ビル(東京都)など、彼を代表する作品がめじろ押しに造られていた。こんな予算の少ない、

彼にとってはちっぽけな仕事に情熱を傾ける時間はない。かたがた、世間に発表するほどに満足いく作品に仕上がらなかつたのではないかと勘繰ってしまう。

本館玄関を入ると、正面には階段が大きな位置を占め、これを上った二階から山の北斜面に沿って地面に男女棟に分かれVの字に延びている。メインストリートである廊下は階段で、ドラマチックである。しかし最初は変化がなかった。それが、上り下りにかかる体力を、元気が子供たちには足腰

を鍛える役目を果たすが、建っている。それは自然の地形を壊さないうような造形である。また、この斜めには階段廊下を暖気が上ってしまい、本館ホールの暖房が効かないとの声もある。私もかつて泊まった際、体育館でバレーボールをしたが、屋根ごう配を山の斜面に合わせたため、斜め天井の片側が低く、時折ボールが天井に当たって試合にならなかつた。デザインや景観への配慮を優先させたため、機能が犠牲になってしまったのは建物にとっても不運であった。

黒川独特の個性は見られないが、それでも地形に逆らわずに傾斜をうまく取り込み、子供の冒険心を養うような造形は、地味ではあるが手堅いものがある。ここで過ごした子供たちには、思い出の舞台として宝物のように記憶に残るに違いない。(林茂樹・日本建築学会会員・小松島市中田町奥林、写真は末澤弘太)

吉野川平野のほぼ中央、山川町の標高一、一三三の露峰高越山は、吉野川に沿って行き来する車窓から眺めると、この地域のランドマークとなつてその存在を誇示している。風が心地よい五月末のこの時期には、尾根に群生する国指定天然記念物「船津のツツシ」が満開となり、大勢の花見客でにぎわう。この山の中腹、標高七二五に小中学生らが宿泊訓練をする県立山川少年自然の家がある。設計者は、世界的巨匠になつ

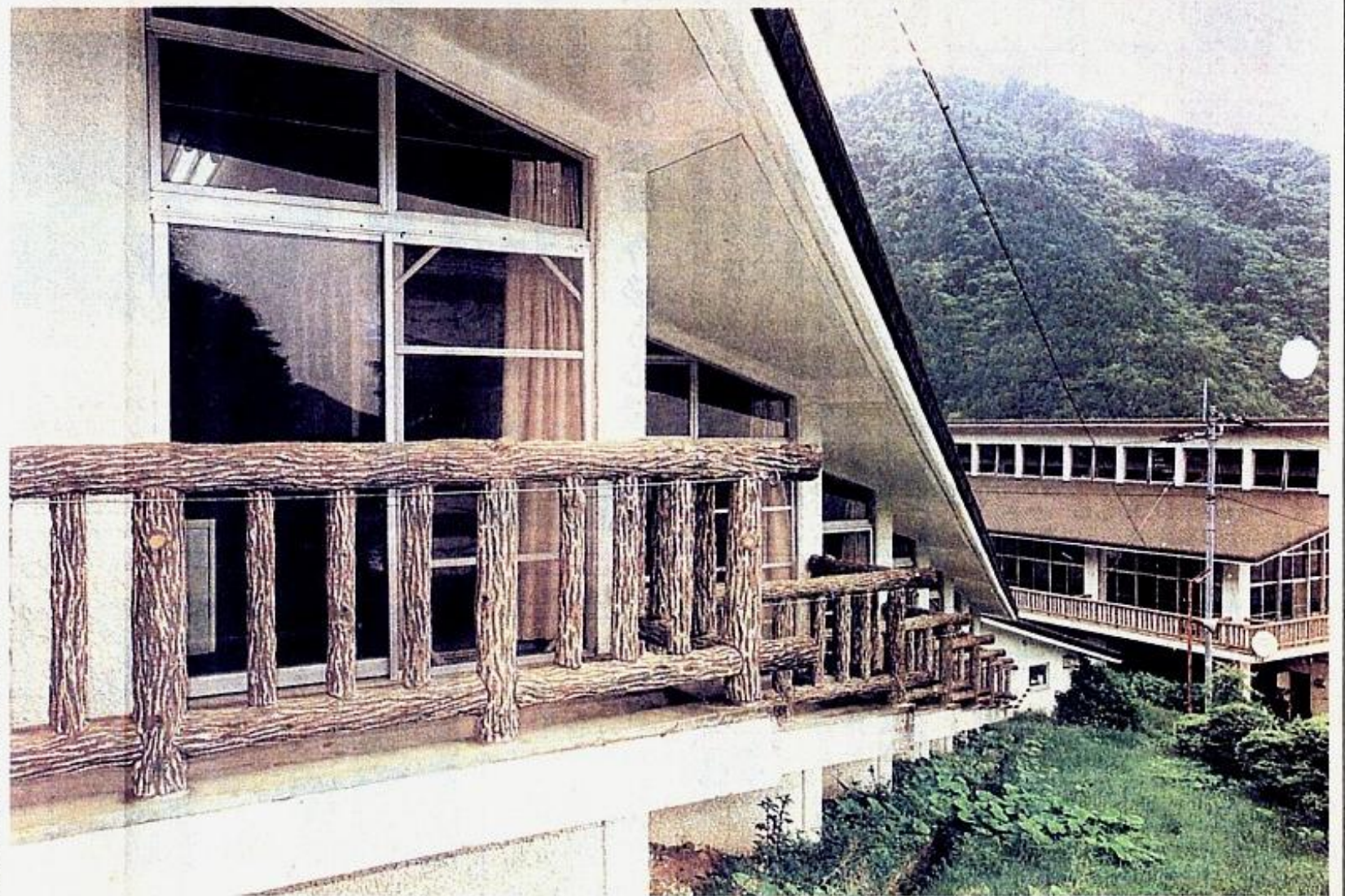


メインストリートが階段の宿泊、子供たちには上り下りも楽しい

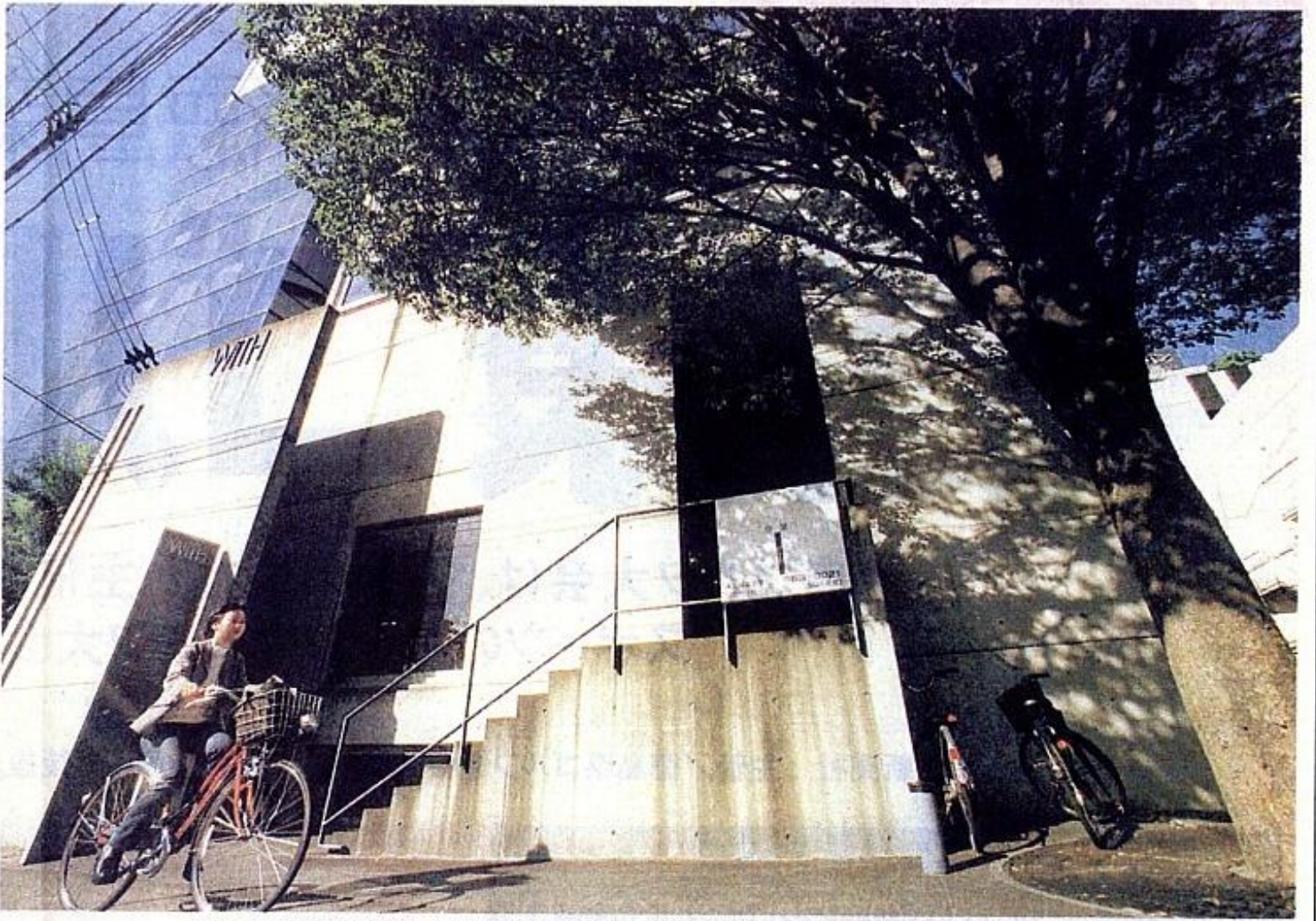


メモ 県立山川少年自然の家 山川町宇野井344の2。1977年完成。西松建設施工。鉄筋コンクリート2階建て延べ3159・55平方メートル。2000年度までの利用者は延べ851268人。

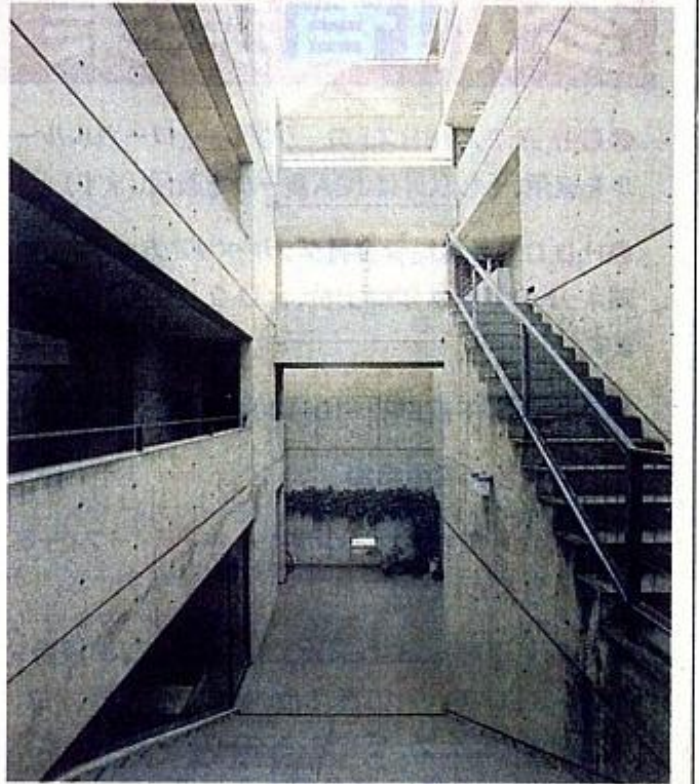
4土曜日に掲載します。



山の斜面に沿って上る宿泊棟。雁行してリズム感を出している。右奥が本館ホール



ビル正面は玄関といった雰囲気はない。階段を少し上がって内部に入る。大きく育ったケヤキが看板代わり



大きく北と南の棟に分かれた中央部分は、地下まで吹き抜けになっている

# とくしま 見 再 発 建 物

19

市の助任川河畔に建つ「ウイズビル」がすべて埋まっておらず、イズ(WITH)ビル」建築関係の雑誌などに一切(昭和六十)年。安藤は小は、私の知る限り、彼の徳 発表されなかったこと。そ 住宅「住吉の長屋」(大阪島での唯一の 作品である。 係者以外で は、その存在

## 色あせない空間の豊かさ

### ウイズビル(徳島市)

はあまり知られていないよ のため、世間であまり彼 のうだ。この建物が不運だっ 作品と知れ渡ることがな かったのは、完工時にテナント

市)で七九年に建築学会賞 を受賞したが、コンクリー ト打ち放しで外を閉ざし、 中庭を取ると、この形を 順次試行していく。ウイズ 詞のようになり、売れっ子 が、ここは閉ざしている。

彼の設計する 建物の仕上げ は、この時期 どの建物をと ってもみな同 じで、コンク リート打ち放 し(一部にコ ンクリートブ ロック積み のある)の壁 に、緩いカー プの金属板葺 きヴォールト 屋根、床は黒 御影のシェッ トパーナー仕 上げ、建具色 はグレーと決 まっている。 これらすべて は、林茂樹・日 本建築学会会 員小松島中 田町奥林、写 真は末澤弘 太

昨年開かれた「淡路花博」に行かれた方は多いと思 すが、会場の淡路夢舞台を設計したのが、今「世界 のアンドー」と呼ばれる建 築家安藤忠雄である。彼の 作品が徳島にもある。徳島



中央の吹き抜けから道路に突き出る横穴。空間の豊かさを醸し出す

△メモ▽ウイズビル 徳島市助任橋一丁目24-1。村木力氏所有。1985年完工。設計・安藤忠雄、施工・大林組。鉄筋コンクリート地下1階地上5階建て、延べ1152・80平方メートル。



ウイズビルは、南側の四階と北側の五階の二棟を東西の二カ所で。これが彼の、売りで あった。ほとんどの建築家 が学校や設計事務所であら び、師を持つことが普通で ある世界で、アンチエリー トとしての貪欲な向上心が 感じられた。

あえて「独学」を武器 に、工業高校卒業が最終学 歴で元ボクサーの彼が七〇 年代初頭は「都市ケリラ居 住」を標ぼうし、攻撃的な 建築表現で最高学府のその また頂点にある東京大学の 教授に上り詰めたことは、 これまでの学歴偏重主義の 現代社会に大きな風穴を開 けて、大学で学ぶことので きな人々に大きな勇気を与えたと 思う。また、世界の数々の賞を受賞した 彼の實力を認め、迎え入れ た東大の器の大きさにも敬 服する。彼は日本が生んだ 建築界の世界的ヒーローで あろう。(林茂樹・日本建 築学会会員小松島中田町奥林、写真 は末澤弘太)

このシリーズは毎月第 4土曜日に掲載します。

# とくしま 見 建 物 再 発

23

文久二(一八六一)年二月初め、粉雪の舞う中を貞光から吉野川の立石渡しを経て、美馬町に向かう一人の青年剣士がいた。男は才谷梅太郎を名乗る。が、実は名を伏せた坂本龍馬その人であった。二夜泊まった貞光の岡家で準備した番傘をさし、胸に勤王活動の思いを含め、美馬町の鎌村熊太家を目指したのである。讃岐の金比羅宮裏で美馬君田(元願勝寺住職)より紹介され、活動の資金を得るために三頭越えでの訪問だった。



主屋の妻側は町屋のように漆喰で塗り固められている。龍馬が訪れたのもこのような雪の日であったのだろうか

の危険を回避するために家族を親類に使い出すなどの同年三月二十四日、龍馬の目標は、後の「船中八景」の内証で屋根裏の隠し部屋は土佐藩を脱藩、維新への策」となって発表され、大屋に残された番傘など、政変連の建白書へとつながった。北陸越前、横井小楠と打ち合わせた勤王活動の目標を八策にまとめて龍馬に託し、はなむけとして資金を差し出した。

## 鎌村家住宅(美馬町)

この龍馬外伝は仮説ではあるが、鎌村家に維新の志士が立ち寄ったことは紛れもない事実のよう。隠し部屋や残された番傘など、政変連の建白書へとつながる。才谷と名乗った(当)に、向かって右側に入り口がある。六間取りで、中央に玄関がある武家の歴敷構

# 残る龍馬の隠し部屋



え。残念ながら空家となっていた一時期に屋敷は荒らされて、西側続き間のオモテ座敷、下の間の床ははがされ、なくなりました。屋根裏の小部屋は、この二部屋が異なる。雪の中さしてきて置き忘れた番傘のほか、十年ほど前に私が調査に訪れた時には小判形のオマルがあり、中には黒ずんだ物体がうす高く盛られていた。家人によると、どうも才谷さんの残したウンチのようだとのこと。しかしその後、屋根修理の時、表に出して以来行方不明になったそう。龍馬の珍しい形見であったろうにとても残念である。(林茂樹・日本建築学会員・小松島市中田町興林、写真は末澤弘太)



主屋妻側いっばいに載せられている鬼瓦。京風の仕様が表れた造り



龍馬をかくまったとされる屋根裏の隠し部屋。この布団で寝たのだと云う

▲メモ 鎌村家住宅 美馬町 美馬町坊僧231。鎌村善子氏所有。

ており、家人は綿密な調査で才谷さんが龍馬であったと確信している。棟の鬼瓦(がわら)は、丸瓦の上に載せるのがこの地域では一般的であるが、妻(建物の長手方向のはし)の平瓦の上にあるため妻側いっばいに鬼瓦が寄っている。カマヤの上に造られる檜出しの小屋根も近辺では見られない意匠で、その部分の屋根勾配(こうばい)を緩くして、その上に小屋を建てるという凝った造りをして

屋には棟札が二枚あって古い方は判読不明、新しい方が天保十(一八四〇)年に塗り込まれ、横も同じで、これは改築時のもの。欄間(らんま)の透かし彫りも見事である。二階は物置となっていて、くたんの隠し部屋が北西隅にある。引き戸を開けると、龍馬が寝たという布団がそこ

# とくしま 見 物 再 発 見 建 物

29

徳島の歴史は藍を抜きにして語れない。徳島市の新町川沿いの商業地も、過去のある時期は藍の商売で発展したともいえる。今回紹介する建物は、読者の皆さんにもおなじみであるが、その所在地西船場は、戦災を受けるまで藍場浜と対をなして藍蔵が立ち並び、新町川の川面に美しい姿を映していた。

現在も徳島の金融経済の中心地であるが、かつても藍をはじめいろいろな荷物を積んだ船が行き交い、商店が新町川に石段の船付き場(雁木)を設けて敷地に直接物資を集積させる商業の中心地であった。

江戸時代から明治中期まで藍で栄えた当時の徳島では、経済界も藍商の力が強

く、一八七九(明治十二)年に全国五番目に創業した久次米銀行も藍商が創設した。資本金も三井銀行に次ぐ全国屈指の銀行であった。

しかし明治二十年代に入り、藍商の衰退とともに久次米銀行も経営に行き詰まり、合名会社阿波銀行が久次米銀行関西部の経営を受け継ぐことになる。

ここでも藍商である西野謙四郎、美馬儀一郎氏らの経営参加によって再建され、一八九六年設立の阿波商業銀行(昭和三十九年、阿波銀行に改称)

## 阿波銀行本店(徳島市)

# 宝船をイメージした造形

設立した大串龍太郎氏ら藍商たちは、電気会社、汽船会社を興し、さらに鉄道セプトは「都市の美観に配慮した設計」であった。造形をかなり意識した大

を設立した大串龍太郎氏ら藍商たちは、電気会社、汽船会社を興し、さらに鉄道セプトは「都市の美観に配慮した設計」であった。造形をかなり意識した大

を設立した大串龍太郎氏ら藍商たちは、電気会社、汽船会社を興し、さらに鉄道セプトは「都市の美観に配慮した設計」であった。造形をかなり意識した大

を設立した大串龍太郎氏ら藍商たちは、電気会社、汽船会社を興し、さらに鉄道セプトは「都市の美観に配慮した設計」であった。造形をかなり意識した大

を設立した大串龍太郎氏ら藍商たちは、電気会社、汽船会社を興し、さらに鉄道セプトは「都市の美観に配慮した設計」であった。造形をかなり意識した大



街中には単純な箱型の事務所ビルが目立つ中、ピロティを設けるなど凝ったデザインが目立ちく



宝船をモチーフにしたデザイン。大きな帆を背に七福神が乗ったイメージを表現している



街中には単純な箱型の事務所ビルが目立つ中、ピロティを設けるなど凝ったデザインが目立ちく

高度経済成長期の真っただ中の六六年、胆な形態で、新町川を行き交う帆掛け船をモチーフに軸にあやかった。七福神はしたともいわれているが、阿波銀行創業以来のシンボル

実際の設計イメージは七福神の乗る宝船なのである。阿波銀行とともに歩んだ藍商西野家(現在は西野金)に家業繁栄のシンボル窓を極力設けず、壁面を広くし、厚みを抑えて建ち上げたシンボリックなデザインになっていく。この帆の部分の東面に取り付くように事務棟が建つが、その接合部に窓を配して離れていくように見せ、帆のイメージを保たせている。建築当時は県内一の高さと広さを誇っていた。営業部門のある一階にピロティ(一階は支柱だけで、二階以上

設計は細部の納まりにも気を抜かない設計事務所の堅実性もあって、センスの良さは時間を経ても変わることはない。長らくこの本店の姿が入ったマッチが配られ、各家庭や事業所でお目にかかっていた。この建物を銀行も誇りにしていたと思う。

新町川河畔にそびえる姿は、戦前の藍蔵に代わる戦後徳島の近代都市の象徴として、私たち阿波っ子の心象風景となっている。(林茂樹・日本建築学会会員、小松島市中田町奥林、写真は末澤弘太)

このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

# とくしま再発見 建物

が、装飾として二階正面の期に建てられたオフィスビルにもこうした様式が流行している。キャピタルと呼ばれるオーダー上部の模様は、植物をモチーフにした立つ明治生命館(一九三四年完成)もコリント式のオーダーが並ぶ古典主義様式である。こちらのオーダーをアレンジしたもの。そのが完全な柱であるの対し、三野町役場のそれは装飾として外壁に付けられて

いることから、ネオ・パロック様式を模したものだといえる。このような西洋館は、建築年が江戸時代以前の建物と比較して新しいこともあり、歴史的な価値が省みられることなく建て替えられていった。現在県内に残される戦前の洋風木造庁舎はこの三野町役場だけだ。

私の所属する阿波のまちなみ研究会が、発足した八四年、徳島市の国府支所が改築されるといふことで現況を調査し、保存要望書を市に提出したが、保存されたのは特徴的な部品だけで、残念ながら建て替えられた。戦前の洋風木造庁舎が次々と消え去っていった中で、三野町が大切にこの庁舎を使い続け

## ネオ・パロック様式を模す

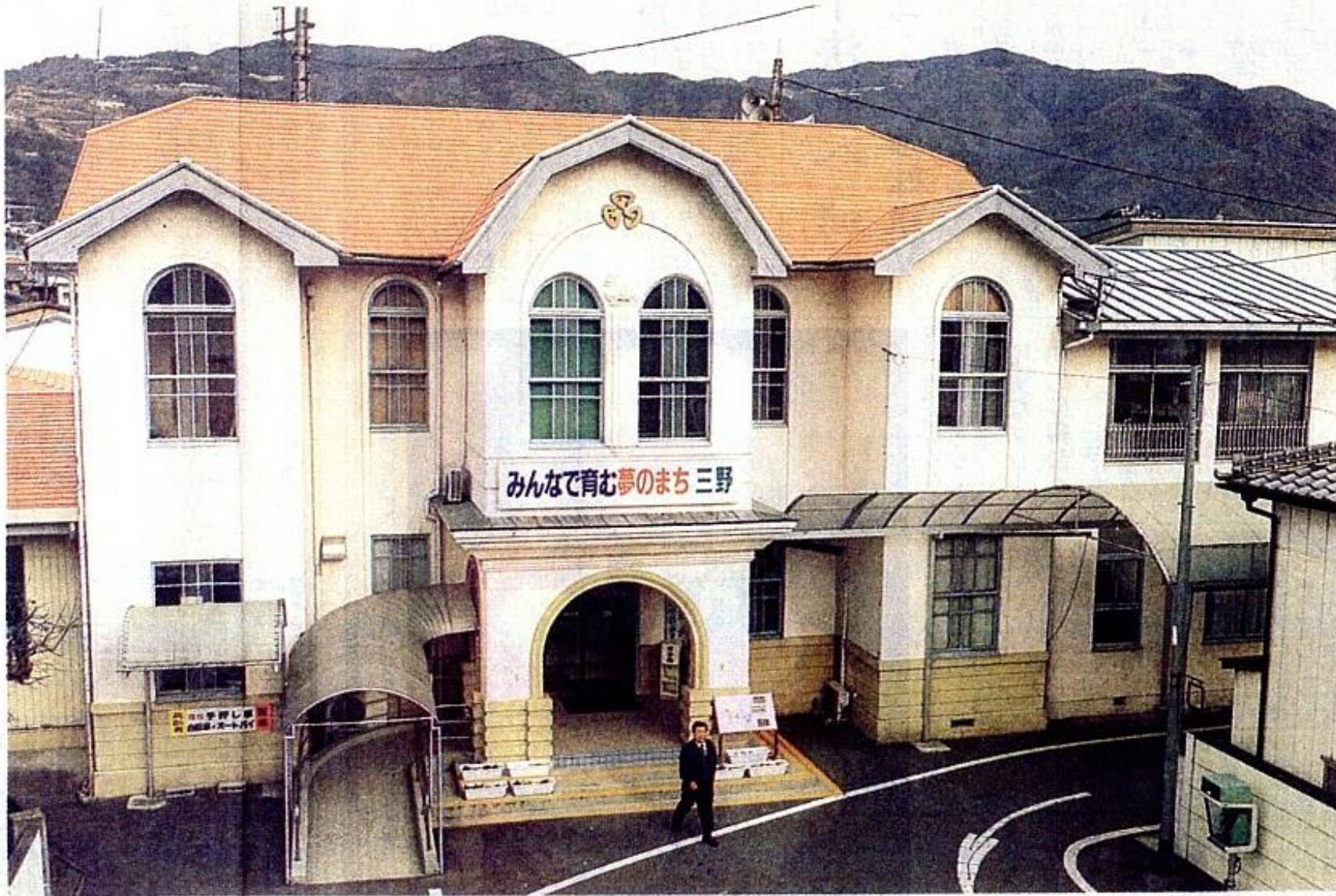
### 三野町役場(三野町)

昨年、阿波学会総合学術調査は三野町で行われ、私の参加する民家班も夏の暑い日、町内を車で駆け回ってかやぶき民家の調査に汗を流した。しかし、民家以上に興味を引かれたのが一九三三(昭和八)年に建てられた役場の庁舎であった。五年ほど前に文化庁「登録文化財」の県候補となる建物調査でこのを訪れていたが、細部を綿密に観察したのは今回が初めてである。

庁舎は玄関ポーチを中央に、同じような形状の部屋を両袖に出張させた左右対称の外観。切り妻屋根を正面に向けて見せており、特に中央部は多角形の「腰折れ屋根」にして変化を持たせている。窓は上げ下げ式で二階の窓は上部がアーチとなっていて、モルタルで形作られたと思われるオーダー(円柱)



人の顔のようにも見える玄関上部のデザイン



前面に切り妻屋根の部屋を突き出して変化を付けた外観



て「られた」ことに敬意を表したい。

最近、この庁舎と同時期に建てられた滋賀県の豊郷小学校校舎の改築問題が議論を呼んでいる。三野町に比べ、建物に対する行政、とりわけ首長の意識の差に三野町も目前に町村合併を考えさせられるものがある。合併があっても、庁舎が何らかの形で生かされ、使われ続けることを願ってやまない。(林茂樹・日本建築学会会員、小松島市中田町奥林、写真は末澤広木)

このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

このように西洋館は、建築年が江戸時代以前の建物と比較して新しいこともあり、歴史的な価値が省みられることなく建て替えられていった。現在県内に残される戦前の洋風木造庁舎はこの三野町役場だけだ。

みんなで育む夢のまち 三野

# とくしま 見 建 物 再 発

39



庭と一体化して使えるように床を低くし、地面にならませている

手掛けたこの新野家が完成したころだったと思われる。迎えにいった私に、徳島空港に降り立った彼が発した言葉は「うどん、うどん」だった。四国に來ればおいしいうどんが食べられると楽しみにしていたように、その言葉が印象深く耳に残っている。

## 新野家(板野町)

私が学生時代、そして建築の設計を始めたころの六〇年代後半から七〇年代にかけて、宮脇氏は「ボックスシリーズ」と呼ばれる住宅を次々と世に送り出し、住宅設計の分野でその名をほしいままにしていたといっても過言ではなからう。

一九九八年十月、脇町で地域に根ざした住まいづくりなどについて考えるHOP E計画(地域住宅計画)全国シンポジウムがあり、パネリストとして参加した私は講師と現地に泊まった。翌朝、建築家・宮脇氏が亡くなった知らせを同宿の建築関係者とともに聞いた。まだまだ活躍が期待されていただけに、六十二歳という若さで逝ってしまったのが残念だった。

私が宮脇氏の姿を見たのは、建築学会賞の現地審査で数人の建築家と来徳したときだった。ちょうど彼が

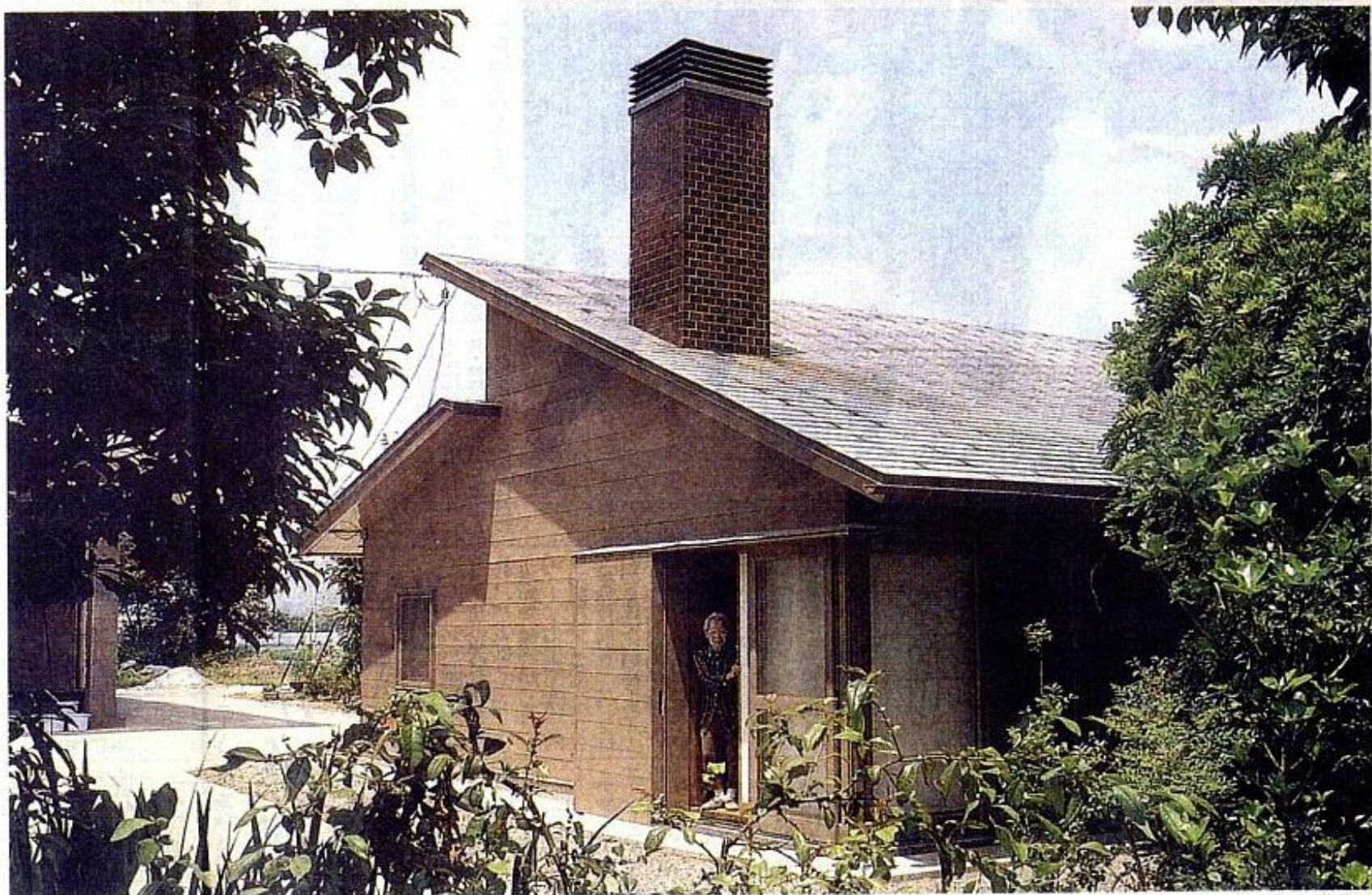
# 通風良く自然と一体



暖炉も宮脇氏が設計。とても暖かいという

宮脇氏の住宅設計は、伝統的な様式や固定観念を否定して、本音と建前を形にしたともいえるような混構造(鉄筋、鉄骨と木造の併用)の作品へと変化している。華々しく輝いていた。住宅についての多くの著作や自分のラジオ番組を持ち、いきでダンディーで格好良かった。師で建築家・吉村順三譲りのディテールへのこだわりは、新野家は老夫婦のために建てられた小さな住まいである。宮脇氏の設計理念が随所にちりばめられている。その理念をキーワードで、隠居屋として住みやすい。そうである。居間はL字型に折れ曲がり、ベッドを置いている奥の寝室部分は居間から見えないようにになっている。南北通風を取るため、北側に小さな窓が開けられているほか、こう配のある天井の上部にはハイサイドライト(採光窓)を設け、

ワンルームで、隠居屋として住みやすい。そうである。居間はL字型に折れ曲がり、ベッドを置いている奥の寝室部分は居間から見えないようにになっている。南北通風を取るため、北側に小さな窓が開けられているほか、こう配のある天井の上部にはハイサイドライト(採光窓)を設け、



軒を低く抑えた外観。設計に住む人への優しさがうかがえる

戸、紙張りの障子といった建具がすべて壁の中に引き込めるようになっており、さわやかな晴れた日には窓が、自然と一体化された場に身を置くことができる。一つ一つ挙げたらきりがなが、さりげなくの中に隠された密さは、住み手の優しさとなって形になっていた。

初めてこの家を見せていただいたとき、一緒に行った仲間と「久々に感動する建物を見ることができたね」と素直に宮脇氏の仕事に敬服した。

林茂樹・日本建築学会会員、小松島市中田町東林、写真は末澤弘太。このシリーズは毎月第2土曜日に掲載します。

〈メモ〉新野家 板野 学大学院修士課程修了町。1987(昭和62)後、宮脇建築研究室を年完成。宮脇設計。木 設立。80年「松川ボックス」で日本建築学会賞受賞。宮脇氏 1936年 賞。91年から日本大学生産工学部教授。98年10月 名古屋生まれ。東京芸 産工学部教授。98年10月 術大学建築科卒。東京大 死去。





妻壁の破風飾り、屋根裏部屋の窓など、デザインの面々が映える

# とくしま 見 発 再 物 建

大正から昭和初期にか  
うな、怪しげな雰囲気であ  
り、洋風建物(西洋館)が  
徳島県内にも多く建てられ  
た。日本の町並みには極端  
に違和感のある西洋館では  
ないが、明治期から、西洋館の多  
くは公共建物や郵便局、写  
真館などであったが、民間  
の建物でそれをリードして  
いたのが医院建築である。  
医療技術の先端性を印象づ  
ける手段の一つであ  
るかのよう  
に、西洋建築様式で建  
てるのが一般的  
になってきたの  
かもしれない。  
徳島市の新町川  
河畔に建つ洋館三  
河邸に雰囲気がよく  
似たような洋館が、同市  
庄町の裏通りに建  
っている。室住家  
である。  
江戸時代から続  
く医師の家系で、

この建物で開業していた。  
木造で小屋裏三階を持  
ち、外観は多様なデザイン  
で楽しませてくれる。普  
通、この種の建物は、安定  
感を持たすために玄関を中  
心に左右対称にデザインす  
ることが多い。しかし、こ  
の建物は、腰折れ  
屋根の妻側を食い  
違いの二段構えに  
して正面に向か  
せ、半切り妻の大  
屋根につなげて変  
化に富ませている。

## 室住家(徳島市)

高い方の腰折れ  
屋根にある屋根裏  
部屋(三階部分)  
の窓は、腰折れ屋  
根の上部の一角  
を、そのままの角  
度で下ろしてひさ  
しにし、折れ下がり



変化に富んだ外観。食い違い2段構えの腰折れ屋根に、上げ下げ窓、ハーフティンバーの外壁

# センス光る腰折れ屋根

あるが、「ハイカラ」の典  
型としてわれわれにロマン  
チックなイメージとあ  
れを感じさせてくれ、片方  
では江戸川乱歩の書く怪人  
二十面相の舞台にもなるよ  
現当主の祖母(八代目、女  
医)が一九七八(昭和五十  
三)年九月に亡くなるまで  
外壁は、木造西洋館の多  
くがペンキ塗りの下見板張  
りが多い中、珍しくハーフ  
ティンバーで、上げ下げ窓  
窓も場所によって棧のデザ  
インにさまざまな変化を持  
たせている。  
建築にあたり、大工は神  
戸の異人館まで行って勉強  
したと伝わっている。  
玄関ポーチを入ると、ホ  
ールには廊下を挟んで左手  
に待合室、診察室、さらに  
今では珍しい電話室。右手  
には応接室や  
階段などが建  
築当時のまま  
並ぶ。

も一枚物が多用されるな  
ど、今では手に入らない材  
料で造られている。  
技術の粋を集めた見事な  
建築であり、いつまでも使  
い続けてほしいと願うほか  
りである。(林茂樹・日本  
建築学会会員・小松島市中  
田町興林、写真は末澤弘太  
氏)このシリーズは毎月第  
二土曜日に掲載します。

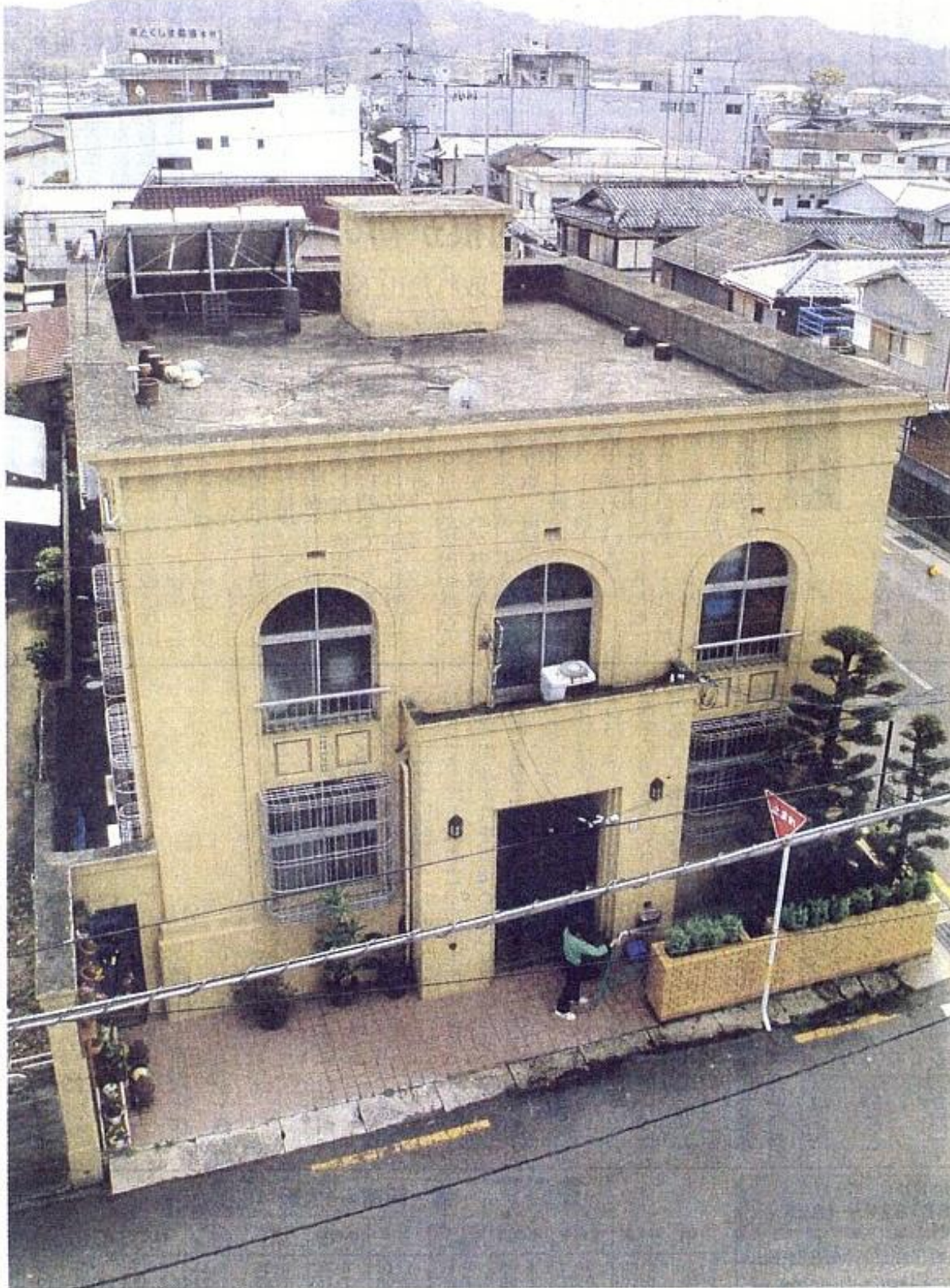


応接室では、欄間付きの上げ下げ窓の枠や、照明飾り枠などに大工の技が光る

応接室は腰  
板張りで、し  
つくない塗りの  
壁と天井、照  
明の枠飾りや  
換気口、そし  
て窓枠の細工  
など、いたる  
ところに大工  
の意気込みが  
感じられる。  
仕上げの木材  
室住家 徳島市庄町  
4-1927(昭和2  
年)年完成。設計、施  
工者不明。木造3階建  
て約330平方メートル。  
ハーフティンバー  
建物の軸組(柱、は  
り、斜材など)が外壁  
に現れた構造様式。英  
国やヨーロッパの民家  
によく見られる。



# とくしま見 建物再発見



街並みの中にどっしりとした存在感を示す外観。屋上から夏の  
花火も楽しめる

港町の小松島は、藩政期には神田瀬川河口南岸にある現在の松島町を中心に市街地を形成し、大小の藍商百軒ほどが軒を連ねる在郷町としてにぎわった。これら藍商たちにより阪神間との航路が開かれ、一九一三(大正一)年に徳島―小松島間の鉄道が開通し、神田瀬川の北部が開発されて千歳橋筋や二条、三条通が商業の中心になるまで、松島町(通称・北町、中町、新町)がその中心として栄えた。しかし、藍の衰退とともに、現在屋敷が残っているのは酒造業に経営基盤を移した清酒金蔵の西野家で、江戸末期建築の主屋(おもや)を中心にした歴史ある屋敷構えはこの町の落ち着いた景観の核をなしている。

中て住宅らしからぬ姿を見せている。その家は、二六(大正一五)年に阿波商業銀行小松島支店として

いる当主の祖父は、上勝町で開業医をされていたが、高輪で医院をたため、ちよ

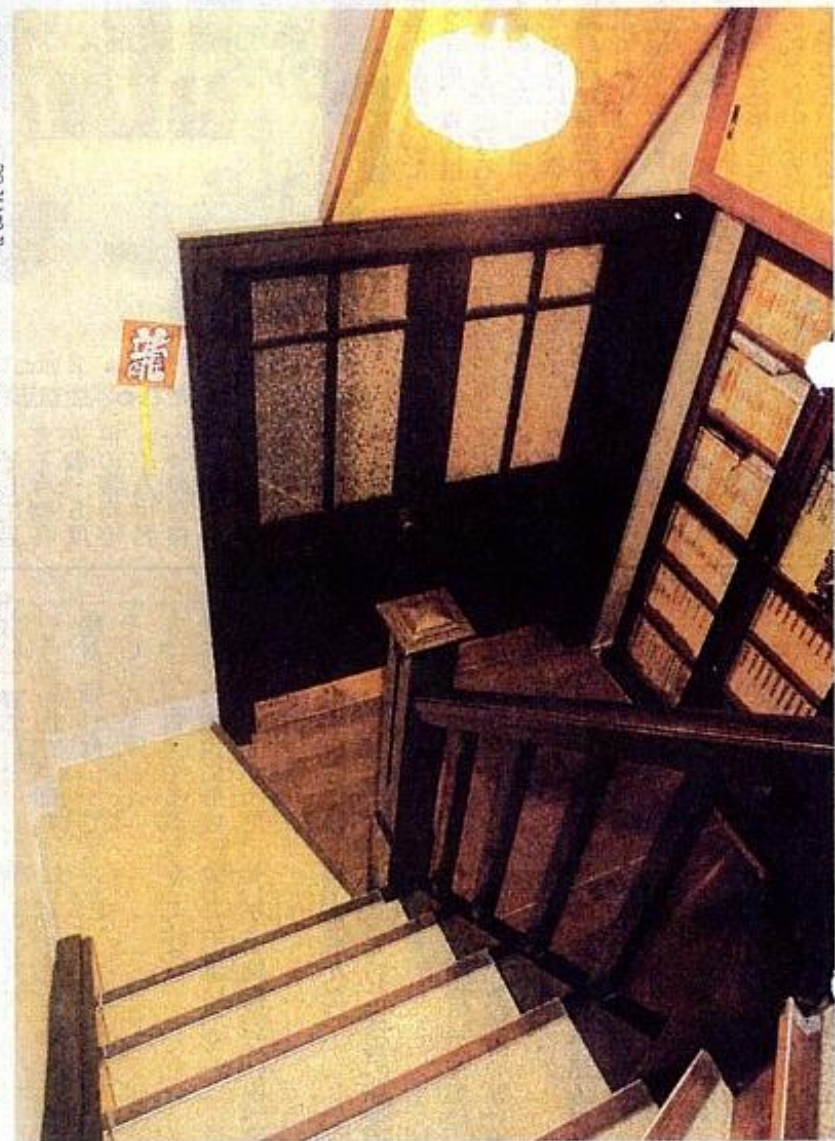
改装されているが、至る所に銀行の面影が残されている。玄關脇の立派な腰板、階

私もこの町で生まれ、中学二年生までこの界隈(かいわい)で育った。通学や寺社での遊び、駄菓子屋への行き帰りに、毎日回もこの家の前を通ったが、子供の私はとりたてて当家に

## 六田邸(小松島市)

### 重厚な外観 銀行の面影

今回紹介する六田邸は、八坂神社の交差点斜め向かいにある。木造の普通の民家と違い、鉄筋コンクリート造りの四角い箱のような形をしていて、街並みの向かいには四国電力などの



建築時のままの姿が残る階段室。扉のガラス模様が美しい

子が気に入る、それらが購入の決め手になったとい

外観は重厚な鉄製外扉を持つ玄関を中央に、左右対称に鉄格子の付いた窓を配し、二階はアーチ窓になっている。簡素であるが、パレット(屋上の低い手すり壁)の装飾などの直線的なデザインから、大正時代に誕生したセセッション(分離派)様式を思わせる。規模は違うものの、同じ年に完成した東京の明治神宮絵画館に似ている。内部は住宅に



鉄格子戸が安心感を与える金庫室。祖父はここを寝室にしていたらしい

六田暉朗邸(旧阿波商業銀行小松島支店) 小松島市松島町9-12。1926(大正15)年12月25日完成。鉄筋コンクリート2階建て。セセッション 1920世紀初頭にかけてドイツ、オーストリアで興った芸術革新運動から生まれた様式で、過去の美術様式からの分離を目指した。建築では機能性・合理性を重視し、四角を基調とした様式が特徴。